

草津市立矢倉小学校通信 令和2年9月1日 NO.10



# やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

## ダメだと言うのは簡単 問題は、だからどうかかわりつづけるか

朝、「おはよう。」の声かけに、ある子は「足が痛い。」と応答した。ケガでもしたのかと心配する私に、続けて「筋肉痛やねん。」さらに「50m走、走ってん。」と。

50m走ただけで筋肉痛になるとは、よほど気合を入れて走り切ったのだろう。そういえば、少し前、「あさって50m走があるう…。」と、うなるように教えてくれた子もいた。

夏休み明けのこの時期、子どもたちにとっての50m走は、単に50mを走って終わりという代物ではない。休み中はずっと運動をしてきたからどれくらい速く走れるようになったらどうか、久しぶりの本格的な運動に自分の体がうまく動いてくれるだろうか、夏休み中もっと体力づくりをしていたらよかったかな…などと、期待と不安をもって臨んでいることが多い。先生たちも同様に、子どもたちの体調を気遣いながら取り組み、10月初めに予定している運動会という晴れの舞台上、どの子も精一杯演じられるように願っている。

今のコロナ騒ぎが始まったころは、学校は休校、不要不急の外出も控えるように…だった。こうして、世の中全体が息をひそめ、互いを警戒し、街中から人を追い払った。やがて学校が再開されるものの、だれかと気軽に会話することも避けなければならなくなった。少し離れてやり取りしたり、透明な遮断板越し、スマホやパソコンの画面越しに会話したりするようになった。学校では、音楽会はとりやめ、参観も集会も、体育や理科、音楽など、ことごとく3密を回避し、道具を共有することや人と触れ合うことはダメ、となった。世の中の動きも、これまであたりまえのようにあった春と夏の甲子園、そしてプロ野球やサッカーの試合も消えてしまった。が、しかし…、である。多くの心ある人たちの支えで、それぞれのねうちが再確認され、今では、形を変えて感動を分かち合える、そんな場面が生み出されるようになった。

大切なことは、コロナだから、こわいからという理由で単純にとりやめるというのではなく、何を制限し、何をかたちあるものにするのかである。せつかくの運動会だ。不安だから何もかもやめてしまおうというのではなく、どのようにとりくめばできるのか、この姿勢を見失いたくない。走ることが許されたなら、その与えられた50mを力の限り走りきろうとする姿、そして仲間を応援する子どもたちの姿に、私たち大人の確かなまなざしとあたたかな心づかいを贈りたい。